

さらにまた、人口学的分析手法の応用という観点からすれば、労働力生命表、職業別生命表といった技術の適用によって興味ある分析が可能となるはずであり、またその結果は労働力政策の立案のために有用な資料を提供することになるとおもわれる。

## 討 論 要 旨

### 野 原 誠

我国の労働力問題に関する中野、林、黒田各技官の貴重な報告、およびそれに対する濱、岡崎両技官のコメントを承けて、所内シンポジウム参加者による一般討論が行なわれた。ここでは、三人の報告者によるコメンターへの回答ならびに一般討論の過程で浮かびあがった若干の問題点および提言の要旨を記す。

#### (1) 中野技官の報告に関して

中野技官は女子労働力の“限界性”を日本経済の労働市場構造の特質から説明したが、それに対して、女子労働力の限界性は主に、女性のもつ出産・育児という人口の再生産的役割に起因する通文化的性質のものだとの指摘があった。また、これに関連して、女子の労働力化と出産力、育児との関係についての研究の必要性が話題にのぼった。

つぎに、中野技官の分析が女子労働力一般の労働力化率の説明に偏していることに対して、職業別、産業別の一層細かい分析の必要性が指摘された。一般的にみれば女子労働力が限界的、他律的性格を色濃くもっているとはいっても、個々の職業、産業をとりあげてみると、“安定的”、“基幹的”労働力部分が増大しているのではないかということである。

また、最近の若年労働力の不足、男女間賃金格差の縮小傾向などを考慮に入れると、女子労働力の限界性があまりに強調されすぎてはいないかとの批判もあった。

#### (2) 林技官の報告に関して

林技官は詳細なデータをもって農家労働力人口の“還流化”現象を明らかにした。それに対して、一般的トレンドとしては、工場分散によって在村通勤化が可能となったがゆえに離村型が減少、その結果農業就業人口の減少率の低下がみられるのである。還流者の内容も女子と中高年男子が大半を占めているところからみて、還流化現象をそれほど積極的には評価できぬとするコメントがあった。他方、還流現象を無視した一般趨勢分析のみでは農家労働力の実態を捉えることは難しいとの意見も出された。

また、農業労働力の分析を産業全般の労働力再生産構造の中に位置づける必要性が指摘されたのに対して、林技官は、農業の安定化があって始めて農民層の自主的分解過程が進み、日本の労働市場の低賃金構造の基盤が薄れるとして、労働市場全般との関連性を強調した。さらにまた、農家の自立経営を達成し、自主的分解を推し進めるためには巨額な農業投資が必要とされるとも補足した。

兼業化・通勤化の原因に関し、農業自体内部の技術進歩が“土地持ち労働力”を可能にしたとの指摘、また園芸・酪農などによる自立経営農家の事例、自主的共同化の事例などに注目すべきだとの指摘がなされた。

### (3) 黒田技官の報告に関して

黒田技官の人口移動の型の転換仮説 (one-way move から multi-way move へ) に関して、趨勢分析をこえた因果分析の必要性が指摘された。とりわけ、質的な分析にとどまらず、移動関数の測定のごとき定量的分析が期待されるとの意見があった。

つぎに、黒田技官による人口再均衡化仮説の基礎となる資料は、大都市圏とその他の地方という形で提出されているが、府県別データによって転入・転出趨勢を分析してみると、若干異なった移動パターンがみられるのではないかと指摘があった。

さらに、近年の移動人口の質的分化傾向を考慮に入れると、カテゴリー別の分析が必要とされるという意見が出された。とくに、これまでの移動が学卒者主流であったのに対し、近年学卒者移動の比重が低下してきているところからみて、学卒者、中高年層とを区別した年齢別の移動分析が望まれるとの指摘があった。

### (4) 労働力不足の問題に関して

本シンポジウム全体を通して、やはり我国の労働力不足の問題が話題にのぼった。濱技官は今後10年間の若年労働力の供給減少傾向は世界でも未経験のことだと指摘し、黒田技官は若年層の激減現象をもって demographic shock と呼んだ。

他方、日本の労働市場全体としてみると、労働力不足は強調されすぎているとの意見が多く出された。たとえば中野技官が明らかにした女子労働力の限界性、林技官のとりあげた通勤形態の農家労働力の存在などは労働力不足の反証とみることもできよう。さらに黒田技官は、中高年では求職が求人を上回っている、求職側と求人側の職業に対する要求にアンバランスが目立つとして、一面では労働力過剰の状態が残存しているとの意見を述べた。